

企画「東日本大震災を経て」について

編集委員長 網谷壮介

2011年3月11日に発生した巨大地震とその後の一連の出来事は、日本社会に大きな影響を与え続けている。想像を絶する規模の津波は、沿岸の町を飲み込み、破壊し、あとには瓦礫の山だけを残していった。1万5千人を優に超える人々が命を落とし、2700人以上の人々が行方不明のままである（2012年11月14日）。11万3千人以上の人々が今なお仮設住宅で暮らしている。さらに、震災と津波は福島第一原発の事故をも引き起こした。炉心融解（メルトダウン）、水素爆発、格納容器の破損。放射性物質が原発から拡散し、原発から20km圏内の地域、飯館村、南相馬市などは「警戒区域」、「居住制限区域」「帰還困難区域」などに指定され、多くの人々が故郷を失っている。福島から離れた地域でも、土地や水、食品などが放射能に汚染され続けており、汚染地図は日々更新されねばならない。

この震災による大きな被害は、しかし、日本社会にそれ以前から潜在していた様々な問題を、深刻な形で人々に突き付けたとも考えられる。「原発安全神話」をつくりあげておきながら、設置する場所は地方に押しつけておき、都市部には電力が「安全に」供給されるということ、あるいは東北地方の過疎化や少子高齢化、その背景にある東京一極集中の構造。社会科学にとっても本気で取り組まなくてはならない課題がいくつもあろうし、自分たちが自明視してきた既存の枠組みや前提自体を揺さぶられた、そういった感覚を覚えた研究者もいるのではないだろうか。

そこで本誌では、社会科学に関わる大学院生が3.11をどう受け止めたのか、自ら研究していくなかで3.11がどのような影響を持ったのか（あるいは持たなかったのか）、それをエッセイの形で忌憚なく書いてもらうという企画を立ち上げた。社会科学が現実の社会を対象にするのであれば、それを観察し記述する研究者自身も、途方もない様相を呈しつつ今なお進行中の出来事から逃れることはできないように思われる。震災とは全く関係のないテーマを研究していても、今回の出来事が自分の社会認識のあり方や研究の力点に影響を及ぼした、というケースもあるかもしれない。震災以後、地震や津波、原発についての言説が夥しく生産されてきた。この企画もそうした中の一つとなること

には変わらないだろうが、いわば研究修養中であり、自らの研究や思想によって現実と直接対峙する場を持つことの少ない大学院生が、震災をどのように見たのかを記録する場になればと思う。付記しておけば、残念なことに、当初この企画への応募はなかった。学科内にだけ公募したということもあるかもしれないが、業績にはカウントされないエッセイという形での企画であり、博士論文やその他の論文の執筆を優先させるような大学院生を取り巻く環境があることも確かだろう。

企画発案者である神子島氏は、戦争文学についての研究の視座から、戦後と震災後を重ねたときに見えてくること、それを記憶し続けておくこととその責任という論点を提出する。実際に被災地を訪れたときに受けた、焼け跡と津波の跡の連想関係が強化されるという感覚が、一個人としての研究者のルポルタージュという形で綴られている。杉平氏の論文は、震災以後において何が「変わった」のか、あるいは無数に生産された「希望」とは何だったかについて、懐疑的に考察している。都心部で起きた「買い占め」や「デマ」の事例が分析され、震災によってあからさまになったのは、日常生活において潜在していた「不安」であることが提示される。杉平氏は、その日常的な不安のありどころを地道に観察し、社会学的に研究する意義を強調している。

神子島氏が論文の最後で書いているように、この2論文で提示された一研究者としての考察が、社会科学に携わる大学院生の議論を触発し、それが継続されていくことを願う。